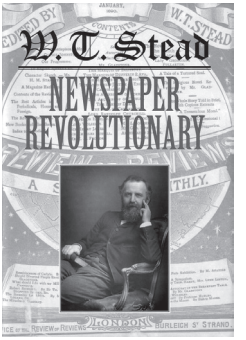
書　評



Laurel Blake, Ed King, Roger Luckhurst and James Mussell, eds., *W. T. Stead: Newspaper Revolutionary* (London: The British Library, 2012)

庄子　ひとみ

本書は、William Thomas Stead（1849–1912）没後 100 年を記念して開催された学会‘W.T. Stead: Newspaper Revolutionary’（2012 年 4/16–17、ロンドン、ブリティッシュ・ライブラリー）の発表論文を纏めた論集である。

19 世紀に英国で発行された新聞、雑誌等の定期刊行物は、印刷技術や流通経路の成長に比例して急速に読者層を拡大していった。気軽に手に取っては読み捨てられる、これらの媒体の散逸性故に、時が経過するにつれて良い状態で体系的に保存管理できる機関が限られてくるのは当然であろう。そして、これらを直接参照したいという願望に応えてくれる数少ない機関のひとつが本学会の主催でもあるブリティッシュ・ライブラリーである。同図書館の新聞コレクション部長だった Ed King は‘Afterword’で、1822 年に本格的に始まった英国内の新聞保管の経緯から、記事データのデジタル化に伴って決定された 2014 年のヨークシャーへの新聞コレクション部門移転について概括しつつ、地方紙 *Northern Echo* 編集者としてのステッドのキャリアに注目し、当時の各種地方紙の出版状況データとともに紹介している。

本書タイトルにあるように、ステッドは、ヴィクトリア朝後期の英国の報道、出版における革新的な発展・変化の最前線で活躍した人物の一人であった。しかし同時に、ジャーナリスト、編集者、出版者、社会の弱者が被っている不公平を訴える活動家、死者の声を届けるスピリチュアリスト、自動筆記も可能な千里眼者と様々な顔をもっていたことも事実である。時に雑多な印象を与えてしまいかねないステッドの仕事の全体像を捉

えようという意図は、狭義の研究分野に留まる事なく、より広いアプローチで分析することが学会の目的として明記されていたように、本書にそのまま反映されている。総勢 12 名の研究者及びライブラリアンによって出版文化及び雑誌研究、フェミニズム、戦争と政治、タイタニック沈没と報道、スピリチュアリズム、オカルティズムの流行、そしてアメリカにおけるステッド受容と様々な切り口から考察が試みられている。全ての草稿が必ずしも分析に至っているとは限らず、ステッドの生涯の部分的な紹介に留まっているものも認められるが、ステッドの生涯だけではなく、英国のジャーナリズムの歴史および出版文化研究の歴史に関心がある向きにも有用な情報や興味深い視点を効率的に参照できる内容であることは間違いない。

冒頭の年表にもあるとおり、出版業界とステッドという括りでみてみるならば、地方紙 *Northern Echo* の編集アシスタントとしてスタートしたキャリアは、*Evening Standard* の前身でもある *Pall Mall Gazette* の編集を経て国際的に展開した *Review of Reviews* の創刊、スピリチュアリズムや超常現象といったより狭い関心へと訴える *Borderland* に代表される雑誌出版と大きく三つの時期に分類できるだろう。中でも、彼の名声を決定的なものとした舞台は *Pall Mall Gazette* である。

目を引くヘッドラインで効果的に大衆の関心を煽るタブロイド・ジャーナリズム誕生の立役者であったステッドは、2 章で James Mussell が指摘しているように、‘Government by Journalism’[1] をスローガンとし、公的なインタビューよりも「私的な会話」(33) に基づいてジャーナリストが主体的に進める調査報道のスタイルを採用した。新しいジャーナリズムこそが迅速に、かつ効果的に世論を動かし、社会に変革をもたらしうる手段だという彼の信念が発揮された最大の成功例としては、‘The Maiden Tribute of Modern Babylon’ (Pall Mall Gazette, 6–10 July 1885) があげられる。児童売春が蔓延する当時のロンドンの状況をギリシャ神話のミノタウロスの迷路とそこに迷い込んだ生贄の乙女に準え「5 ポンドで買われる 13 歳の少女」とセンセーショナルに論じた一連の記事は反響を呼ぶものの、取材方法の違法性を指摘され、ステッドは禁固刑をうけることになる。しかし、それがかえって読者の声を高めて、署名活動に至る程積極的に世論を動か

す引き金となり、最終的に合意に基づく性行為の最低年齢を 13 歳から 16 歳にひきあげる法改定に至った。Roy Greenslade が指摘しているように、電話の盗聴をはじめとした ‘Dark Art’ を用いた取材報道（4）も、倫理的な理由によるのであれば、そして仮に違法であっても良い結果が最終的に社会にもたらされるのであれば、世間は容認するものなのだ。大衆の感情に効果的に働きかけ、煽動できるタブロイド・ジャーナリズムの特徴と可能性をステッドがいち早く理解し、活用していた証拠だろう。

このような、ジャーナリストとしてのステッドの成功を支えた時代を読む先見性や執筆、報道姿勢の確立に至った背景を分析するにあたり、英国の北東部 Northumberland の出自及び *Nothern Echo* 編集時代にとりわけ注目しているのは King および Tony Nicholson だが、Nicholson は文筆家としてのスタイルを都会型（Metropolitan）と地方型 (Provincial) に分類し、Matthew Arnold は前者でステッドは後者であると分析している。ステッドはそのキャリアの大半をロンドンという都会中心に過ごしたわけだが、その時代も含めて、ステッドの取材、執筆スタイルの根底に一貫して認められるのは、北部特有のアイデンティティなのだという分析は興味深い。Laurel Brake は報道におけるステッドの輝かしいキャリアのなかで埋もれてしまっているエピソードのひとつである、彼が 1890 年から手がけた定期刊行物の索引年鑑 ‘Annual Indexes to Periodicals’ にかけた情熱と失敗の経緯に着目し紹介している。国内外の定期刊行物の記事や写真を一般読者や報道関係者がその関心に応じてより容易に検索し参照できるように、多大な労力と費用をかけて着手されたが、実際は図書館や報道関係者、あるいは学生にしか需要はなく、資金繰りにも困窮した結果、1903 年に頓挫した。しかしながら、短命に終わったこの挑戦を、ステッドがターゲットを見誤った失敗と単純に位置づけるのは性急であろう。Brake が最後に示唆しているように、今後の Periodical Studies の発展という見地からも、このステッドの「失敗」は、世紀転換期における英国と大陸間の定期刊行物の内容を概観する貴重な資料になり得るはずなのだから。

ステッドの人生は 1912 年のタイタニック号沈没事故によって突然終わりを告げる。当時すでに英国だけではなく米国でも著名だったステッドは、自らの死も国内外の新聞のヘッドラインになって報道された。しか

し、ステッドの肉体が死を迎えた後も、霊媒を経由して娘のエステルの手を借りつつ、タイタニック沈没当時の乗客の様子の報告が行われた。その後も死後の世界からメッセージを送り続けたとされるステッドの報道人としてのキャリアは、最後にその言葉が発信されたとする 1936 年まで、家族や友人によって引き延ばされることとなったのである。この奇妙な死後出版は、降霊術に積極的に参加し、死後の世界の様子を聴取して伝えるだけではなく、テレパシーや千里眼といった超能力を操る者として、その過程を科学実験のレポートのごとく伝達することに熱心だった生前のステッドだからこそ招いた状況だろう。9 章の Justin Sauseman が 11 章を執筆している Roger Luckhurst の論考を手がかりに分析している通り、大衆におけるオカルティズムあるいはスピリチュアリズムの流行をステッドはたしかに先導した。しかし自らの内にある帝国主義的な見解を正当化し、効果的に宣伝する手段として、テレパシー等の超能力、あるいは疑似科学に分類可能かもしれない言説を戦略的に、かつ意図的に用いていた点も否めないのである。

本書を読了して、改めてステッドの報道にかける情熱と行動力に圧倒されると同時に、第一線で活躍したジャーナリストでありながら、その言動に矛盾が多い点にも気づかされる。プロテスタントの家庭に育ちながら、黒魔術も含めたオカルティズムの儀式に積極的に関わり、死後の世界と現世の通信というスピリチュアルな経験を宣伝する。女性の権利を訴えるサフラジェットを支援し数多くの女性たちが意見を表明できるように執筆の機会をあたえながら、あまりに開放的な発言には閉口するステッドの態度の背後に透けてみえるのは、慎ましい善き女性像へ固執したままのヴィクトリア朝の男性像である。愛国主義者を敵にまわしながらも強硬にボーア戦争に反対し、世界平和を提唱しながら世界を旅してまわったコスモポリタンのようでいながら、海軍の艦隊に掛かる国防予算の引き上げを不可欠な経費として要求する。そのような矛盾性を内に孕みつつも、彼は一貫して、声をあげることのできない社会的弱者の為に、ジャーナリズムの可能性を信じて突き進んだ。社会のより良い変容をもとめて精力的に報道に関わったステッドの行動力と先見性は、現在まで続くマスメディアの時代の礎を築いたことは間違いない。本書において各分野の研究者たちが、敬意

をこめてステッドの仕事と生涯の分析を試み、かつその論考の多くがさらなる研究可能性を示唆して終わっているように、デジタル化によって報道のあり方が現在進行形で変容している現在も尚、出版文化研究の対象でありつづける人物だろう。

注

1. W.T. Stead, ‘Government by Journalism’, *Contemporary Review*, 49 (1886), 673.